

日本語の取り出し指導における読書活動 —リテラシーの発達に重点をおいて—

三好 大 (東京学芸大学大学院教育学研究科 院生)

1. はじめに

本実践は、2015年6月より東京都下のA小学校における取り出し指導の一環として行ったものである。対象の児童は、小学5年生に在籍し、フィリピンにルーツを持つレオ(仮名)である。来日から約2年が経過しており、日常会話には支障はほぼない。しかし、教科学習の参加には思考力や表現力が不足しているため、困難が生じている。そのため、それらの力を高めるために、リテラシーの発達に重点を置いた支援を行った。

2. 活動の背景

2.1 リテラシーの定義

国立教育政策研究所(2007)によると、リテラシーのうちの1つとして、読解力とは、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力である」(p.40)としている。このことから、単なる読み書きの力以上のことが求められていることが分かる。本実践では、自らの知識と可能性を発達させ、書かれたテキストを利用し熟考する能力に重点を置いた。

2.2 リテラシーの発達を重視する意義

まず、知識や可能性を発達させるという観点から、レオの興味関心のあるテーマのテキストを利用することで、レオに既有知識を活用し、日本語の力を高めていくことが出来ると考えた。また、国語科以外の教科でも、書かれたテキストから熟考し自分の意見を持つことや、それらを図式化するなどして活用することが求められている。よって、本実践は、リテラシーを重視することは、教科学習を支える言葉の力を育むことに有益であるとだと考え実施した。

3. 実践の目標

本実践は複数のユニットからなる活動であり、その全体の目標は、「戦争に関するさまざまなテキストを読み、自分の意見を持つことができる」である。本発表では、1つ目のユニットについて紹介する。このユニットの目標は(1)、「戦争に関するテキストを読み、自分の意見を持ちそれを文章にまとめることができる」、(2)「読み取った内容を組み合わせる筆者の示したテーマを読み取って整理することができる」、の2点を設定した。

この背景には、文章全体のテーマを理解することや自分の感想を持つことが難しいというレオの課題がある。そこで、レオの知識や可能性を発達させるという観点から、彼が興味のある「戦争」をテーマにしたテキストを読み、自分の既有知識や経験と結びつけて、自分の感想を持ったり、読み取ったことを関連づけて理解したりすることができるのではないかと考え目標を設定した。

4. 活動の展開と工夫

4.1. 活動の展開

本活動は、4時間で1ユニットの活動とし、レオの関心を持つ戦争をテーマにした物語、トミー・ウンゲラー著『オットー 戦火をくぐったテディベア』を読み、①あらすじの把握と初発の感想の確認、②語彙と内容の確認、③主人公の心情の変化の把握、④筆者の意図の探求という流れで行った。(丸番号は時数)

4.2. 活動の工夫

レオの日本語の力への配慮として次のような工夫を行った。内容確認のクイズを行い、②では、○×式のクイズをワークシートを用いて行い内容を確認した。また、③では感情を表す形容詞について確認した上で、その感

情が表れている場面を探すという工夫をした。

さらに、レオの経験を活かすための配慮として、①ではレオの発言に対してフィリピンの死者を埋葬する方法について考えさせる働きかけを行った。

5. 活動の様子

5.1. 活動①のエピソード

〈背景〉

レオが一通り文章を読み終えて、感想を求めたところ、登場人物らの最期までが描かれていないのでつまらないという発言をした。

〈エピソード〉

その発言を受けて、主人公のテディベアであるオットーをどう扱うかについて尋ねると、この話の通り他の人に渡ると答えた。それに対して、理由を求めると黙ってしまったので、日本では、一緒に棺に入れて燃やしてもらうことがあるという話をした。すると、フィリピンでは火葬はしないため、その考え方には同意しないということをつたえ、悲しさはあったものの、分かる言葉を使って一生懸命に答えた。

〈分析〉

これまで、自分の意見を求めても、分からない一言で終わってしまうことが多かったが、自分の経験と結びつけるような働きかけをすることで、自分の意見の理由を文化の違いを踏まえて述べることが出来た。

5.2. 活動③のエピソード

〈背景〉

「気持ちを表す言葉」の言葉の形と意味について確認した後、「嬉しい」・「悲しい」・「怖い」・「楽しい」の4つについて表現できる場面がないか探す活動を行った。

〈エピソード〉

レオは、中盤のオットーが襲撃に巻き込まれた場面のページをまず開いた。すると、「爆弾が爆発する大きな音がした、これ『怖い』だ。」といった。そのあとも、オットーとか

つての持ち主が再会できた場面を開いて、これは「嬉しい」と言った。また、持ち主の少年が連れて行かれたのを見て「悲しい」と答えていた。4つの形容詞について、それぞれ当てはまる場面が見つけられたので書く活動に移ろうとした。しかし、それをワークシートに書いて表現することは困難だったため、書く活動はあまり取り組めなかった。

〈分析〉

形容詞を絞って、その感情が表れている場面を探すという活動にすることで、「悲しさ」と「嬉しさ」というテーマについては理解できた。一方で、その2つを組み合わせることで熟考し、この作品のテーマを理解するには至らなかった。また、理解したことを中心概念である形容詞があっても再構成して文章にすることは困難があった。

6. 結果と考察

まず、目標(1)は、これまで、根拠を示して理由を説明する様子は見られなかったため、達成されたと言える。これは、対話を通して関連づけを促すことが効果的だったのではないかと考えられる。目標(2)については、形容詞を手掛かりに、中心となる感情と筆者の思いは把握できていた。一方で、嬉しさと悲しさの2つを組み合わせることで考察することは出来ておらず、十分な熟考は行えていなかった。

今回の実践全体では、リテラシーに重点を置いたことにより、読んだことを深める機会を作ることができ、思考力や表現力を高めることにつながった。また、文章の理解度を確認する段階を細かく設定したこと、本人の経験や知識を生かすテーマ設定および問いかけという工夫によりレオの持つ力を引き出すことが出来たと考えられる。

【引用文献】

国立教育政策研究所(2007)『PISA 2006年調査評価の枠組み OECD 生徒の学習到達度調査』株式会社ぎょうせい